
お姉さんになる日

Yoi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お姉さんになる日

【Nコード】

N5596F

【作者名】

Yoi

【あらすじ】

小学校教諭を務める「私」。担任するクラスの少女が、放課後の彼に話しかける。「先生、お母さんが、妊娠したの」お姉さんになれると喜ぶ少女だったが、教師はやがて、ある不可解な事実に気がつく。

「ねえ、先生。」

放課後、教室に残って先日の課題の添削をしていた私のもとへ、クラスの子供の一人がやってきた。

「なんだい？」

私は答案から目を外し、少女の顔を見ていった。少女はまん丸い目を更に円くして言った。

「お母さんが妊娠したの。」

私はどきりとした。少女の口から妊娠という言葉が飛び出すとは予測していなかった。

「ほんとかい。」努めて冷静に私は言った。「じゃあ、お姉さんになるんだね。」

「お姉さん？私が？」少女の円い瞳が喜々と輝いた。

「私、お姉さんって呼ばれるの？」

「そうだよ。」私は微笑んで答えた。

「もつと、お姉さんらしくしないと、赤ちゃんに笑われるぞ。」

「お姉さん、お姉さん。」少女はうれしそうに何度も繰り返した。

「お姉さんなんだ、ちいさい私が。」

「小さくても、お姉さんはお姉さんさ。」私は笑った。

「そうだよね。」少女は言った。

「赤ちゃんは私よりきつと小さいもの。」

少女はその場で意味もなく、くるくると回った。うれしさが彼女をそうさせるようだった。

「先生は、赤ちゃん見たことある？」

「そりゃあるよ。」

「小さいよねえ。」少女は両の手を、赤ちゃんくらいの大きさに開いた。

「おててなんかも、こんなに小さい」

彼女の指をすぼめるようにして表した。

「私見たことあるんだ、ケン君が家に来た時。」

「ケン君？」

「ケン君。お母さんのお兄さんの子供。」

「それはいつって言うんだよ。」

「そう、いそこ。」少女は真面目な顔で言った。

「ケン君とっても小さいの。」

そう言うときまた両手でケン君の大きさを表した。

「もうすぐケン君みたいな赤ちゃんが生まれるんだもんね。・・・」

先生、名前はとうしよう。」

「それは、お父さんお母さんが考えてくれるさ。」私は笑った。

「君が心配しなくても、良いことだよ。」

少女は真っ直ぐに私を見ていった。「でも、家、お父さんいないよ。」

不思議そうに首をかしげた。

「じゃあ、お母さんが考えるのかな。」

私ははっとした。

少女の家庭は母子家庭だった。父親は存在しなかったのだ。私は言葉を失った。

「先生、先生。」少女は不思議そうな顔で私を見ている。

「どうしたの先生。」

「ああ．．、なんでもないよ。」私は努めて微笑んだ。「お母さん、うれしそうだった？」
少女は頷いた。

「うん。笑ってた．．でも。」

「でも？」私は聞き返した。

「でも、お母さん私に聞いたんだ。妹か、弟ほしくない？って。」
「なんて答えたの？」

「もちろんほしいって。」少女は自身の胸の内を表すように、体をきゅっと縮めた。

「いもうとがいいなって。男の子って、すぐに散らかすでしょ。私、ご飯作って上げるんだ、サヤちゃんに。」

「サヤちゃん？それって、妹の名前？」

「そう。お名前。」少女はにかりと歯を見せて笑った。「私のサヤちゃん。」

「なんだ、もう勝手に決めてるんじゃないか。」私も笑った。
えへへ。少女は少し恥ずかしそうに身をくねらせた。

「おかあさん、結婚するの？」

私は努めて柔和な表情で彼女に問いかけた。

少女はきよんとしていた。

「何で？」

「なら、いいんだ。」私は苦笑いした。「なんでもないんだよ。」

「変な先生。」少女は首をかしげた。

「先生、お母さんと結婚したいんですよ。」

「ち、違うよ！」私は今考えると不自然なほど慌てて否定した。

「だって、じゃあ何でお母さんが結婚するかどうかなんて聞くの？」
少女が意地悪そうに笑った。

「好きなんだ。ミワちゃんが、たつくと結婚する時も、そうだったもん。」

私は苦笑した。

「先生は、お母さんが、もっと幸せになったらいいなと、思っただけだよ。」

私はそう弁解した。

「ふーん。」少女は不思議そうに言った。

「お父さんいなくても、幸せだけだな。わたし。」

そう言って首をかしげていた。

少女はしばらく話した後、生まれたら私にサヤちゃんを見せてくれる約束をして、手を振って帰って行った。

私は少女が帰ってから、なかなか仕事に手が着かなかった。

そうしているうちに、上級生の担任をしている2つ上の彼女が来たので、その話をすると、彼女は笑っていた。

「保護者の家庭の事情を詮索しなくても良いじゃない。」

「でも、担任としては、子供の家庭の様子くらい把握してないと・・・。」

「言わなくても、向こうからやってくるわ。」彼女はあきれていた。
「知らせる必要のあることなら。」

返す言葉がなかったなので、私はそのまま黙っていた。
彼女も私の脇に突っ立って、しばらく黙っていたが、やがて、

「サヤちゃんって、名前もいいかもね。」そう言って、教室を出て行った。

私はすっかり忘れられていた、答案の丸付けを再開しようと赤ペンを持ったが、

彼女の置いていった言葉の真意にそこでようやく気がついて、廊下の向こうに小さくみえる後ろ姿を、慌てて追いかけた。

（後書き）

先生だって一人の人間。

それに気がつくのは、自分が当時の先生と、同じ位の年になってからなのではないでしょうか。

子供の無邪気な言動に、表情に出さないまでも、はらはらしていたんだろうなあ。そう思って書いた文章です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5596f/>

お姉さんになる日

2011年1月8日02時43分発行